

キ^{さんいん}ラ[★]リ

別冊

BEST OF THE SOBA

山陰
人
モノ
味
いいね

特集 うまいもの紀行
蕎麦を極める。
山陰・岡山・広島の名店60軒

ようこそ、
蕎麦味へ誘う。

別冊

2021

価格 990円

八雲立つ出雲の地から 「平和・環境・健康はひとつ」を 世界へ発信する

小松電機産業株式会社は、

世界の平和な未来を創出するため

1994年に「人間自然科学研究所」を設立。

以来、世界の戦争・平和記念館を訪問し

学習や献花、寄付を行うなどの活動を通し、

紛争・戦争に至る背景と経緯、

実態の調査研究を重ねてきました。

そして今、私たちは、

対話を重ね、対立や緊張を解き、

共感・共生する道を探求し続けることで

さらなる世界の恒久平和創出のために

一步一歩前進してまいります。



クラウド総合水管理システムのパイオニア

やくも **水神** スマートフォン・
yaku mo Suishin タブレット管理

出雲発!! 水関連施設を管理する
「やくも水神」ネットワーク!

2000年発売以来

2021年6月現在

480自治体 14,000施設

北海道、青森県、岩手県、宮城県、秋田県、山形県、福島県、茨城県、栃木県、群馬県、埼玉県、千葉県、東京都、神奈川県、新潟県、富山県、石川県、福井県、山梨県、長野県、岐阜県、静岡県、愛知県、三重県、滋賀県、京都府、大阪府、兵庫県、奈良県、和歌山県、鳥取県、島根県、岡山県、広島県、山口県、徳島県、香川県、愛媛県、高知県、福岡県、佐賀県、長崎県、熊本県、大分県、宮崎県、鹿児島県、沖縄県

クラウド型リアルタイム表示(特許第657660号)
令和2年度 中国経済産業局長賞 受賞



気象庁降水情報と連携



東京都武蔵野市雨水監視



災害対策本部

雷害・災害に強く水関連施設を最適管理
水のICTで あなたの街・日本・世界が変わる!!



継体天皇ゆかりの国営・県営農業用水施設
九頭竜川・日野川・足羽川水利事業で採用



北陸農政局・福井県

東京都町田市・千葉県千葉市で採用
ポンプ制御盤



小松電機産業株式会社

<https://www.komatsuelec.co.jp>

人間自然科学研究所

<https://www.hns.gr.jp>

松江市乃木福富町 735-188 湖南テクノパーク内 TEL 050-3161-2490 東京・大阪・仙台・松江・ソウル・バンコク





八雲立つ出雲から、世界へ縁をつなぐ。
しじみアーティスト・イラストレーター

なかじま まさえ

宍道湖のしじみ貝に
アートとしての
新たな命をふきこみ、
人と人、異文化をつなぐ。

文・構成／日高むつみ 撮影／神庭恵子 デザイン／多田桐子

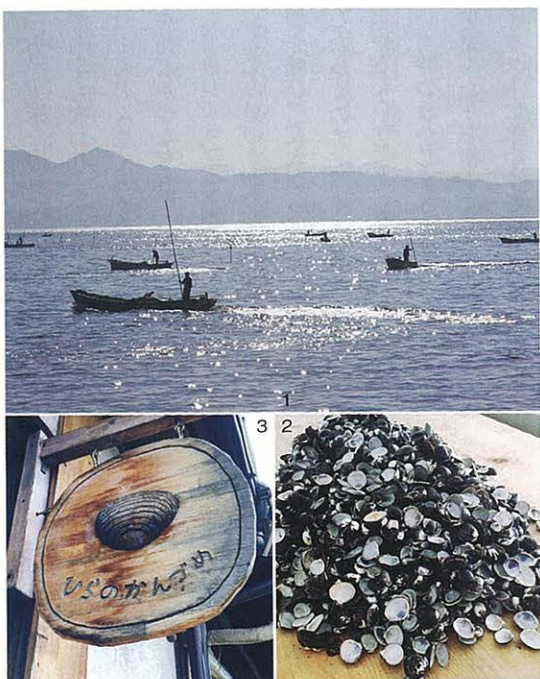


朝

霧立つ静かな湖面にいくつもの小舟が浮かぶ。船の上には鋤簾を巧みに操る漁師の姿。湖底をさらうように収穫されたヤマトシジミは大粒で、貝いっぱいにくよかな身が詰まっている。滋味豊かなしじみは松江の人間にとって身近な日々のご馳走であり、全国に誇れる郷土の味である。松江で生まれ育ったなかじまさえさんにとっても、しじみは懐かしい故郷の味。そして幼い頃に親しんだ祖母の手仕事に欠かせないものだったという。

ささやかな、慎ましやかな、
しかし豊かで愛おしい、
暮らしの中の手仕事

「祖母はいつも何かしら手を動かしていました。そんな時、祖母のかたわらにはきれいな端切れや色とりどりの糸と紐、小さな鈴やボタンとともに、しじみの貝殻があったのを憶えています」しじみの貝殻で作る根付は、松江の女性にとって母から娘へと受け継がれる手しごとのひとつ。なかじまさん自身も祖母から根付づくりを教わった。「ささやかな、つつましくかな、しかし豊かな日常の中の彩り。いわゆる伝統工芸とは異なる、女性たちが暮らしの中で共有してきた名もなき手仕事。」



1／宍道湖のしじみ漁。朝の光を受けて輝く湖面に小舟が浮かぶ。2／素材のしじみ貝。この状態から①歯ブラシで洗い、②消毒を行い、③天日干しの後に④貝合わせをして⑤ヤスリで磨いて、ようやく下処理が完了する。3／宍道湖産ヤマトシジミを扱う松江「平野缶詰」も協力。故郷からアトリエに貝殻が届く。

そういうものを愛おしいと思いながら
大きくなったように思います」

自分の表現を見出せず
苦しんだ20代

やがて成長したなかじまさんは進学で松江を離れ、就職とともに東京へ。「もともと絵を描くことが好きだったこともあり美術系の短大へ進学。インテリアデザインを学んで内装系の会社に就職したんですが、仕事を始めてみて実は立体が苦手だったことを自覚して…（笑）」

内装の仕事は思った以上に男社会だったこと、また体力勝負だったこと

なかじま まさえ

島根県松江市生まれ。東京都小金井市在住。イラストレーターとして活動するかたわら、2013年に宍道湖産しじみの貝殻を素材としたアクセサリを開発、「しじみちょう Made by Masae Nakajima」として展開し、都内の百貨店やマルシェなどのイベントに出展。2019年にはパリの《Japan Expo 20》に参加し、国内外から注目される。



「しじみちょう Made by Masae Nakajima」の代表作、対の貝殻を使ったブローチ。しじみ漁の景色などが細かくペイントされている。



もあって結婚を機に退社。移り住んだ千葉で販売や営業のアルバイトを経験しながらイラストを仕事として手がけるように。

「子育てを考えると、家のこともやりながら自分のペースで進められる仕事にシフトしたい。しかも長く続けられる仕事に…と思っていた頃、友人に誘われて地元のデザインフェスタに出展したのがきっかけです。子どもの頃から好きだった絵を仕事にできたことは嬉しかったですね」

その後26歳で第一子を出産するが、子育てしながらの仕事は思った以上に大変だった。初めての子育てからくる体調不良に加えて、自分の作風が決ま



1/「JapanExpo 20」会場の様子。2/「JapanExpo 20」ブースでは浴衣姿で対応。3/子どもたちから高齢者まで幅広い層を対象にしたワークショップにも積極的だ。昨年からオンラインでも開催。

祖母のしじみ細工に端を発したなかじまさんのしじみアートは、世界に舞台を広げようとしている。2019年には、パリで開催された「Japan Expo 20」に海外初出展。モノ自体のクオリティはもちろんだが、その背後にある物語やフィロソフィが高い評価を得た。

「しじみの貝は2枚で1対。互いにぴったりと合う相手は他にないことから縁結びの象徴とされています。しかも、そのしじみを育む宍道湖は良縁を授けてくださる出雲大社のお膝元。人と人、

国と国、地方と都市など異なるモノ同士が出会い、良い縁が広がるよう祈りを込めて制作していることを、作品を通じて感じ取ってもらえたのだろうと思います」

なかじまさんは今、作品に使う素材も広く世界各地に目を向けて探し始めている。パキスタンのラリーキルトにスウェーデンのリネン、フランスのレーズリボン、日本の刺し子や久留米緋…。女性が身近な人のために作り暮らしの中で受け継がれてきた素材が、宍道湖のしじみと出会い、アクセサリとして新たな命を得て誰かの手で大切にされていく。

「布や糸だけではなく和紙や漆も素材として大きな力を秘めていると思います。しじみをキャンパスに、さまざまな暮らしの手仕事と共存する。互いに優劣を競うのではなく違いを認めて横につながり合えたら、社会はもっと豊かなものになる。そう思っています」

そして手仕事の喜びやしじみアートに込めた想いを一人でも多くの人に知ってもらおうと、各地でワークショップを開催している。

宍道湖で生まれ、なかじまさんによって新たな命を得たしじみちょうは、人や地域、文化の垣根を軽々と超えて未来へ向かって羽ばたいている。

サリーの古裂などにステッチを施したラリーキルトも素材に。古いものや不要なものを活かし新たな価値を生み出す考え方は、なかじまさんのものづくりと共鳴する。



故郷のしじみ貝を使ったアート制作は無心の祈りに似て

しじみ貝を使ったアクセサリ作り

「イラスト専門のスクールに入學して基礎から学び直しましたが、自分の表現方法を探すことは孤独な作業。泣きながら絵を描いていましたね」

暗いトンネルを抜けたのは2008年のこと。住まいを千葉から東京の小金井へ移し、長らく悩まされた体調不良も漢方のおかげで解消しつつあった。「グループ展の準備をする中で、アクリル絵の具をベースにして、ようやくイメージ通りの世界を描けるように」

この時、重い雲が切れて空が見えたような気持ちになったのだらう。なかじまさんは念願の第二子を授かった。



上/なかじまさんのイラスト作品「夏を追いかけて」と「海辺」。観る人に子ども時代を思い起こさせる、どこかノスタルジックでロマンチックな作風。パッケージのイラストも手がける。

1/漆作家・小島ゆりさんとのコラボで生まれた作品。松江藩お抱え塗師蒔絵師 12 代目にして漆壺齋継承者の小島さんは中学の同期生。つやつやと光沢のある色漆がしじみ貝を彩る。2/きれいにした処理を施した貝を布で包み縫い合わせて作品を作る。気が遠くなるほど緻密な作業だ。根気の良さや手先の器用さは祖母譲り。

を本格的に始めたのは、第二子が産まれた後のこと。地域のマルシェに出展することになったものの思いつくのは自身のイラストを素材にしたレターセットなど。他に自分にできるものはないだろうか。考えた末に思い出したのが、何年か前に一度イベントに出したしじみのオブジェだった。

「その頃の私にとって故郷は遠くなる一方。実家を離れて年月が過ぎ、結婚で名字も変わり、松江と自分を結ぶ糸はどんどん細く弱くなっていく。それを何とかつなぎ直したくて、宍道湖のしじみ貝でオブジェを作ったんです」

しじみ貝のオブジェは予想以上の反響を呼び、友人からはアクセサリにしたら？のアドバイスももらった。

「やるなら今だ！ そう思いました」

当時のなかじまさんは、やんちゃな男児ふたりを相手に子育ての真っ最中。イラストに集中するほどのまとまった

しじみをキャンパスに世界各地の手仕事をつなぎ心の豊かさを共有する

時間は持てないが、しじみ貝のアクセサリなら隙間時間に少しずつでも進められる。

「送り迎えの合間、ファミレスでちくちくと針を動かしながら思い出したのは祖母の姿。そういえば今の私と同じように、家事の隙間のちょっとした時間に手を動かしていたなあ」と

一心に手を動かしてものを作ることには祈りに通じるものがあると、なかじまさんは言う。

「誰かを思っているものを作る時、人は無心になります。自我を離れ、深く深く意識の海にダイブするイメージでしょ。うか。潜った先にあるのは、個人を超えて誰にも共通する集合的無意識。そこに至った時、私たちは国や文化の違いを超えて想いを共有し、心の深いところまでつながり合えると感じています」

